

氏名(本籍)	ほん だ けい すけ 本 田 啓 輔 (東京都)			
学位の種類	博 士 (言語学)			
学位記番号	博 甲 第 5974 号			
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	<b>The Relation of Orthographic Units to Linguistic Units in the Japanese Writing System: An Analysis of Kanji, Kana and Kanji-Okurigana Writing</b> (日本語表記体系における表記単位と言語単位の関係：漢字、仮名、および漢字と送り仮名による表記の分析)			
主査	筑波大学教授	Ph.D. (言語学)	池 田 潤	
副査	筑波大学教授	博士 (言語学)	沼 田 善 子	
副査	筑波大学准教授	博士 (言語学)	那 須 昭 夫	
副査	筑波大学教授		加 納 千 恵 子	
副査	國學院大学教授	Ph.D. (日本語学)	カイザー・シュテファン	

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語表記体系に關与する言語単位と表記単位を分析し、両者の関係を巡る問題を考察する。表記体系とは、一揃いの文字を用い、一揃いの慣習的なきまりに従って、所与の言語を書き表すための記号体系のことで、表記体系の下で、当該言語は音素、音節、形態素、語などの言語単位に還元され、個々の言語単位は原則として一つまたはそれ以上の文字から成る表記単位によって表示される。そのような言語単位と表記単位は相互に關係付けられているが、どのような言語単位がどのような表記単位によって表示されるかは、表記体系によって異なる。本論文は、日本語表記体系に關与する言語単位と表記単位に焦点を当て、いくつかの基本的な問題について論じるものである。

本論文の主眼は次の二点である。第一は、漢字表記と仮名表記のそれぞれにおいて、どのような言語単位が表示の基本単位となり、それらがどのような表記単位によって表示されているかを考察することである。漢字表記の場合、個々の表記単位は主として有意義な音列を表示する (e.g. 五 /go/)。先行研究では、それらを語と見なす立場、形態素と見なす立場、形態素に対応する音列と見なす立場などがあり、統一的な見解は示されていない。仮名表記の場合、個々の表記単位は、主として無意味な音列を表示する (e.g. か /ka/)。先行研究では、それらを音節と見なす立場とモーラと見なす立場があり、やはり統一的な見解は示されていない。本論文は、漢字表記と仮名表記を別個に検討し、前者においては形態素が、後者においてはモーラが表示の基本単位であることを主張する。また、それぞれの表記で用いられる表記単位についても考察し、一文字で一つの言語単位を表示する表記単位 (e.g. 五 /go/、か /ka/) と、複数の文字で一つの言語単位を表示する表記単位 (e.g. 五月雨 /samidare/、きゃ /kya/) を区別する。さらに後者については、個々の文字と言語単位の構成要素との間に対応關係が見られる還元的な表記単位 (e.g. 葡萄 /budoR/) と、そのような対応關係が見られない非還元的な表記単位 (e.g. 五月雨 /samidare/) とを区別する。

第二は、漢字表記、仮名表記、および混交表記の一種である漢字と送り仮名による表記のそれぞれにおいて、表記単位がどのような原理によって言語単位に関係付けられているかを考察することである。本論文は、漢字表記については両者が主として morphographic principle によって関係付けられていることを示す。これは、表記単位を個々の形態素に関係付けると共にそれらを語の形態論的構造に応じて並べるという原理である。加えて、複数の読みを持つ多読性漢字について、そのような漢字が本来的に曖昧であり、専ら語彙的に指定された規則によって特定の読みに関係付けられることを論じる。次に仮名表記については、表記単位と言語単位が moraic principle によって関係付けられていることを示す。これは、表記単位を個々のモーラに関係付けると共に、それらを形態素や語のモーラ構造に応じて並べられるという原理である。最後に漢字と送り仮名による表記については、表記単位と言語単位が morphographic principle と moraic principle の組み合わせによって関係付けられていることを示す。これにより、漢字は個々の形態素に、平仮名で構成される送り仮名は個々のモーラに関係付けられる。また、「食べる」のような表記に関し、漢字「食」が語幹 /tabe/ に対応し、送り仮名「べ」が語幹末尾の /be/ を書き出すというような、一種の部分的重複を仮定する分析を提示する。さらに、多読性漢字について、その一部は送り仮名によって明確化されることがあるが、大多数は語彙的に指定された規則によって特定の読みに関係付けられることを主張する。

本論文は、序章を含む全六章で構成される。各章の概要は以下の通りである。序章では、本論文の目的および前提となる事柄を示し、取り扱う問題の範囲を規定し、論文の構成を示す。

第1章では、言語学における表記体系の位置付けと、表記と言語の関係について述べる。また、本論文の議論に関連する日本語の言語的特徴を、主に語彙層、形態論、音韻論の観点からまとめる。さらに、日本語の文字と表記の基本的な特徴をまとめ、日本語表記体系を multi-script system (多文字種体系) と位置付けた上で、漢字、平仮名、片仮名のそれぞれが半自律的なコンポーネントとして機能することを論じる。

第2章では、仮名をモーラ文字とする説(モーラ文字説)の妥当性について考察する。従来、モーラ文字説は主に音節量の観点から支持されてきた。本章では、日本語音韻論におけるモーラの重要性、および近年の文字類型論を巡る議論などからも、モーラ文字説が支持されることを論じる。さらに、一部の先行研究で例外と見なされてきた二重字(e.g. きゃ)と長母音音節の表記(e.g. こう)についても、モーラ文字説の枠組みの中で取り扱えることを示す。

第3章では、漢字を形態素文字とする説(形態素文字説)の妥当性について考察する。まず、形態素文字説は先行研究で広く受け入れられているものの、様々な問題が指摘されていることを示した上で、それらの問題を大きく二つに分け、各々について検討する。第一の問題は、漢字の大多数は表音的要素である音符を含む形声文字であるため、一義的には表音文字と見なすべきではないか、というものである。これに対し本章では、音符の表音度が低いことを指摘し、そのような主張は妥当性が低いことを主張する。第二の問題は、漢字には形態素と対応するとは言えないものがある、というものである。これを受け本章では、当て字、熟字、字義が不明瞭な漢字など、先行研究で問題視された六つの事象を取り上げ、個別に検討し、漢字には一部に表音的なものや表語的なものもあるが、全体としては形態素文字と言えることを論じる。さらに、異形態の表記、地名の表記などにも触れ、形態素文字説の長所と短所を示す。

第4章では、複数の読みを持つ多読性漢字の曖昧性について論じ、送り仮名がそのような漢字を明確化するという考え方を批判的に検討する。まず、漢字や仮名などいくつかの文字体系を例に挙げ、一般に多読性の文字が曖昧であることを示す。次に、多読性漢字を特定の読みに関係付ける原理として、語彙的に指定された規則を仮定する先行研究を概観する。そして、そのような仮定の妥当性を検討するため、文脈などの外的要因が多読性漢字の明確化に寄与するか否かについて考察する。その後、送り仮名が多読性漢字を明確化するという考え方に焦点を当て、その妥当性を検討する。送り仮名には確かにそのような明確化機能が認められるものの、その有効性は大きく制限されているというのが本論文の主張である。そして、その裏付けと

して、『常用漢字表』掲載の多読性漢字を対象とした調査の結果を報告する。

第5章では、本論文で示した議論をまとめ、結論を導くと共に、今後の課題を提示する。

## 審査の結果の要旨

日本語の表記体系は人類史上もっとも複雑なものであり、文字という記号体系に関心を有する世界の研究者が大きな関心を寄せている。そのため、日本国内と海外の両方で日本語の表記体系に関する多数の先行研究が存在するが、国内で日本語によって書かれた文献は海外であまり知られておらず、海外の研究も日本では十分に読まれていないのが現状である。国内における先行研究と海外における先行研究の両方をふまえつつ英語で日本語の表記体系について論じた本論文は、上記のギャップを埋め、日本語表記体系の一般言語学的研究の活性化に貢献する貴重な論考であると言える。この点は、本論文の中核をなす二つの章が国際的に高い評価を受け、*Written Language and Literacy* という学会誌に掲載されている事実からも示唆される。

本論文の二つの主眼のうち、第一に関しては、従来の諸説を包括的に整理し、多くの例をもとにそれらの優劣を仔細に検討する議論には説得力があり、これがこの問題に関する今後の研究において避けて通れない知見となることは間違いない。第二の主眼に関しては、著者が提案する分析には文法研究の面からも興味深い点がある。今後、文字表記と文法のインターフェースの研究へと発展する可能性を秘めており、注目に値する。このように、本論文は、日本語表記体系に関与する言語単位と表記単位を分析し、人類史上もっとも複雑な表記体系の原理を解明する試みとして高く評価される。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。まず、本論文は日本語の表記体系に特化した内容となっているが、この種の議論により説得力をもたせるためには、世界の言語の表記体系も含めてより一般言語学的視点から論じる必要がある。たとえば、本論文では、モーラが仮名表記の基本単位であると主張するが、仮にこれが日本語にしか見られない特徴であるとしたら、日本語のためだけに文字にそのような類型を想定すべきかどうか議論の余地があろう。また、本論文では平仮名と片仮名を基本的に同じ体系として扱っているが、両者の間には微妙な違いも見られる。その点で、本論文における片仮名の扱いにはやや不満が残る。さらに、本論文は現代日本語の表記体系をもっぱら共時的に論じるが、文字はその性質上、純粋に共時的に研究することが困難である。したがって、過去の日本語における表記体系も視野に入れ、現代の表記体系がどのようにして成立したかに踏み込む必要もある。

しかし、上記の問題点はいずれも著者自身によって今後の課題として自覚的に受け止められており、本論文の学術的価値を損なうものではない。

平成24年1月13日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。